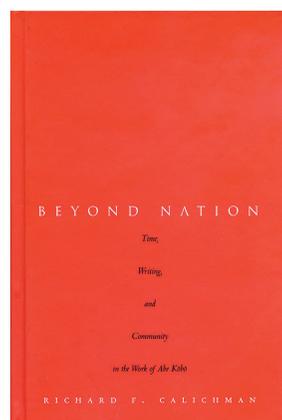


リチャード・F・カリチマン

『国家を超えて——安部公房の作品における時間、書くこと、そして共同体』

Richard F. Calichman, *Beyond Nation: Time, Writing, and Community in the Work of Abe Kōbō*. Stanford: Stanford University Press, 2016.

鳥羽耕史



ニューヨーク市立大学シティカレッジ教授の著者カリチマンは、「近代の超克」座談会から竹内好を経て柄谷行人や酒井直樹にいたるまで、戦中から現代にいたる思想史に関心を寄せてきたが、近年、精力的に安部公房に取り組んでいる。二〇一二年に「安部公房の『他人の顔』における戦争の記憶と人種問題」(『Quadrant』一四号)を日本語で発表したのをはじめ、翌年には安部公房の『内なる辺境』をオリジナル編集で翻訳し、マーガレット・S・キーンによる『嘘からでたまこと——安部公房のリアリズムのプロジェクトにおけるドキュメンタリー、発見、そして再帰性』の書評も発表した。そして昨年の本書に続き、まもなく安部公房の『けものたちは故郷をめざす』の翻訳も刊行されるはずである。

まず、本書の構成を紹介しておこう。序章では、疎外を扱った日本の作家、という英語圏での安部公房のイメージを、その作品における時間、書くこと、そして共同体の認識を検討することで変える、という目的を述べる。安部にとってのアイデンティティの認識は、移動と定着の関係を再想像することによって問題化されるとし、移動を本来的なものとする安部の立場を示す。一九四六年の詩「時間と空間」に循環的時間から非循環的時間への出発を読み、一九六二年のエッセイ「今日」をさぐる執念」に現在の統一性や完全性をおびやかし、くりかえし崩壊させるものとしての未来との関係を見出す。そして、一九六七年の座談会「燃えつきた地図」をめぐって」での共同体への欲望を喚起する

郷愁への攻撃を、一九六九年の講演「続・内なる境界」での「亡国の芸術」に関する議論につなげ、安部にとって芸術は国民国家、およびあらゆる形の国家への帰属意識に対する抵抗であるとする。

「一 砂に刻まれたしるしたち——『砂の女』について」では、広く称賛された一九六二年の小説について、書くことが人間主体によるものだという伝統的な考え方を超えて、一九四四年のエッセイ「詩と詩人（意識と無意識）」のハイデガーやニーチェに影響を受けた議論を参照しつつ、存在論的なアプローチで考察する。書くことには過去、現在、未来が奇妙に織り合わされており、この小説においては形態と流動の間の緊張関係とかがわつてくるという。形態がアイデンティティを提供するのに対し、流動はまったく無関係なものどうしの相互関係を示すことによつてこのアイデンティティが間違っている可能性を暴露する。この緊張関係は主人公と『砂の女』との性交だけでなく、砂自体に関する考察によつて示される。安部のテクストは文学と哲学の幅広い関係へと開くことで理解できる、というのがカリチマンの主張である。ロドルフ・ガシェ、デリダ、ハイデガー、ラクーラバルト、ジャン・リュック・ナンシーといった哲学者たちの仕事が参照されるのみならず、安部のテクスト自体も精緻に読解される。

「二 攪乱の時間——「内なる境界」について」では、一九六八年と翌年に発表されたエッセイと講演にあらわれた時間と空間の

関係を探究する。安部が一方で時間を空間の介入にさきだつ純粹な運動と捉えつつ、他方では時間と空間が根本的に相関するものだと示していることについて、カリチマンは前者を不可能だとし、後者の考え方で存在を分析する。安部による他者性の概念は空間だけでなく時間をも含み込んだ運動の一般化をしているが、それは国民国家によるあらゆる形の領有に抵抗するものとしての彼のユダヤ人認識から来ているという。そのユダヤ民族概念の持つ問題をも指摘しながら、カリチマンは、国民国家のイデオロギーの核心であるアイデンティタリアニズムの論理に対する安部の異議申し立ての強力を示す。

「三 『他人の顔』における共同体の魅惑」では、一九六四年の小説を、共同体概念に焦点をあてて読解する。伝統的に共同体はアイデンティティと差異を対立するものとみなすが、それを不満とする安部は、共同体の編成を偶然性に基礎をおいたものとみなそうとする。カリチマンは、安部がマイノリティの登場人物をどのように取り上げているかに光をあて、経験論的ではなく構造的に理解されるべきものとしてマイノリティを論じる。共同体の形成にはその陰面としてのマイノリティが創造される必要があるということ踏まえると、安部がこの小説のなかで在日朝鮮人やアメリカ合州国での黒人を扱ったことが、ナシヨナリズムと人種主義の共謀に対する攻撃であつたことが理解できるといふ。

「四 介入——安部公房の」では、合州国の日本研究における安部の読まれ方を探究するために、介入の概念をうちだす。日本文学の作家として登録されることで、国家への所属の論理に対する安部の攻撃が否認されてきた矛盾にカリチマンは注目し、日本研究の制度が、どのように国民国家と個々の主体との結びつきを緊密にしてナショナルリズムを強固にしてきたかを示す。彼はドナルド・キーンやジョン・W・トリートといった学者による安部の解釈をたどり、文化主義、オリエンタリズム、そして人種主義とともにある、日本のアイデンティティを普遍的なものでなく固有のものにしたいという欲望を見出す。介入の概念が、客体の構築において本来は主体と客体の相互関係であったものを含んでいたことを示し、日本という客体に対する制度的な働きかけが、安部のテキストがつねに混乱させようとしたアイデンティティの論理に基礎をおいていることを明らかにする。安部にとって、論理は時間のなかに刻まれたものとして理解されなければならないのだ。安部の思想は研究対象の地位に引き下げられ得ないもので、その反対に、方法論のレベルで彼の著作を理解することが求められているという。

終章では、一九六四年の短編「時の崖」に生の時間に内包された死を読み取ることからはじめ、安部の思想は、既成のアイデンティティ概念への脅威というレベルで、最も生産的に捉えられる

とする。彼の日常の現実への関わりは介入として認識されなければならない。安部にとって介入のない現実はいないという。そして同年のテレビドラマ『目撃者』から、現実と見えているものは事前決定の効果として把握されなければならないという洞察、外部の現実とは純粋に外部のものではなく、主体の媒介のレベルで構成されている部分がある、という認識を見出す。また、再び『砂の女』を参照しつつ、時間が経過しても変わらずにあり続ける自己概念の拒絶や、国家共同体の拒絶を読みとる。そして、「彼ら」という客体をより正確に理解するために、主体の「我々」が膨大な情報を集めることを求められる地域研究の制度の有害性を指摘し、安部を読むことがこの認識論的な畏の自覚と、客体と制度を違ったかたちで見ることに関与すると述べる。

この概要だけでわかるように、本書はすぐれた安部公房論であるだけでなく、安部のテキスト自体を理論として用いて日本研究の制度を相対化する可能性をひらいたものだ。その意味で、これは先に挙げた「内なる辺境」の序章であり、鳥羽耕史編『安部公房——メディアの越境者』（森話社、二〇一三年）にも収録したカリチマンの「社会理論としての安部公房」の続編として、そこで思い描かれた可能性を十分に展開したものとして読むことができよう。四章におけるキーンとトリートへの批判はかなり痛烈なものだが、これを単なる個人攻撃と捉えてはならない。これは

北米の日本研究、ひいては酒井直樹のいう「西洋／その他 (West and the Rest)」の「西洋」の立場から「その他」を研究するものとしてはじめられた学問全般への批判になっているのだ。

この批判を、日本における日本文学研究にあてはめることはできるだろうか。国学の伝統に発し、近代のナショナリズムとともに歩んだ国文学研究の制度は、欧米諸国の国民文学に並ぶものとしての国文学の確立を使命としてきた。ここでは、先の批判が客体としての固有性に向けられていたのを、主体としての固有性の議論に変えれば応用できるように思われる。カリチマンも指摘するように、自らは日本文学研究の制度に安住しながら、文学作品の内容にかかわる「ナショナリズム批判」を展開する、というのは日米双方での流行になっているわけだが、これに無関係だと言いきれる研究者は多くないだろう。文学部の日本文学研究に関わるコースに所属する研究者や、国際日本文化研究センターの研究者はもちろんのこと、はやりの国際系・領域横断系の学部や組織に所属する研究者にとっても、自らにかかわってくる問題のはずである。特に、日米ともにいわゆる「実学」や自然科学優先で人文学が軽視される情勢下では、一方で研究領域の必要性や重要性を指摘しつつ、他方で自らも荷担しているナショナリズムを自覚し批判する、という両面作戦が必要になるだろう。

ただし、安部公房については事情がもう少し複雑になってくる。

私小説が支配的だった日本文壇における異端であり、カフカに影響を受け、多国語に翻訳された「国際的作家」という日本での定型的な評価に対し、それにある程度同意しながらも能や狂言などの日本文学の伝統に位置づけようとしたキーンらの評価は大きく異なるからだ。さらに近年、彼の旧満州での生い立ちや引き揚げの経験に注目しながら、ポストコロニアルの文脈で読み解く試みも盛んに行われており、欧米との関わりに偏った従来の「国際的作家」とは違う意味での国際性への関心が高まっている。従来の「国際的作家」評価はしばしば「日本の誇る」という語りに戻収される傾向があつたが、先にも述べた制度内ナショナリズム批判の裏にさえ陥らなければ、新しい方向には可能性があるだろう。

ともあれ、カリチマンの開いた哲学的読解の地平は、安部公房研究、および人文学の研究にとって重要な達成である。国籍・所在地を問わずこうした研究にかかわる者としての「我々」は、自らにつきつけられたものとして本書を読み、応答していく必要があるだろう。